

第1章

日本の南アジア経済研究

——戦前から戦後へ——

戦後の南アジア研究には戦前の研究との断絶ないしそれへの軽視がみられるというのが、戦後の研究者の共通の認識のようである（たとえば山口博一 [115]、長崎暢子 [82]）。こうした認識は戦前の研究の再発見という経験を通じて痛切に感じられるものであろう。ここに例としてあげた長崎の場合も大川周明のインド観の検討がこのような主張へとつながっている。

たしかに、地域研究という名称が戦後のものであるからといって、その名のもとに行われる研究が、戦前の研究成果を無視してよいことにはならない。しかしそのためには、戦前の南アジア（＝インド）研究の詳しい検討がなされねばならない。純粹の歴史研究や宗教史研究などの分野では、戦前戦後の研究の関連を論じたものが存在するが（荒松雄 [3]）、地域研究の分野における類似の試みとしては、おそらく前記山口 [115] があげられるにとどまろう。山口はそのなかで、羽仁五郎「東洋における資本主義の形成」[91]と矢内原忠雄『帝国主義下の印度』[112]という二つの古典的作品、および第二次世界大戦下に設立された総合インド研究室の活動の重要性を示唆している。

戦後にまとめられた3種類の文献目録（[27]、[28]、[45]）を手掛かりにすれば戦前期のインド政治ないし経済への関心の軸として次の3点があげられよう。第1には、植民地統治の「先例」、もしくは植民地社会としてのインド、第2に、日本綿業における原料供給地および市場としてのインド、そして第3に、第二次世界大戦の帰趨を握る戦略要衝としてのインドという三つの関心軸である。最後のものは明らかに第二次世界大戦以降に顕在化した間

題であり、それまでの研究関心が新たな時局的関心のなかに収斂してゆく様をみることもできる。多数の翻訳書や研究書の形で政治・経済関係文献が最も集中して刊行された時期でもある。

羽仁、矢内原の研究はいうまでもなく第1の関心に沿うものである。総合インド研究室の活動は、参加者の意図はともかく、第3の関心への対応として生まれた。第2の関心軸は、尾崎彦朔 [47] の指摘はあるが、これまであまり強調されていない点である。しかし、日本の綿業関係者によるインド綿業事情の報告書が、綿業における資本、労働、経営制度(とくに経営代理制度)などに関する示唆的な指摘に富むことは、戦後の研究、たとえば本巻第II部収録の小池賢治の研究 [57] によっても実証されている。

戦前戦後の研究の関連を考える場合にも、この整理のしかたは研究の流れをおさえる手掛かりとして有効であろう。戦後のインド研究の一つの出発点は、経済研究を念頭におけば、やはり羽仁、矢内原の著作であった。矢内原の研究は、すでに戦前にも、岡倉古志郎の論文「インド民族資本の基本的性格」[46]などによって検討されていたが、植民地インドの資本主義的發展の特質についての矢内原の指摘は戦後の研究者、たとえば伊藤正二 [20] や清水学 [73] によって継承された(第2章参照)。

また羽仁の著作の一つのポイントは、氏族制の残存などに象徴されるアジアにおける前近代社会の構造をいかに理解するかにあった。この点では、戦後初期に書かれた松井透論文「インドの植民地化をめぐる問題」[106]が戦前戦後の橋渡しの位置にある。ここでは、当時の研究状況を反映して「イギリスの侵略者が直面した十八、九世紀のインド社会について」の像を描くというより、「外側からの」アプローチとしてインド収奪の機構とそれを粉飾する論理とが分析される。「インドにおいては、いうところの『文明の拡張』は実は近代と前近代の植民地的癒着を押し進める標語であったこと、また平和に新市場を開拓する夢が、いかに経済外的強制、一般に政治権力に支えられ乱暴に推進された」とかという認識に、抑えた筆致ではあるが、氏の植民地インド社会観が示されている。カースト制度と村落共同体、土地制度など、イ

インド社会自体の認識を深める作業はインド史研究者によってその当時着手されたばかりのところであった。

たとえば、荒松雄らによって村落共同体や土地制度史がとりあげられ、戦前の羽仁だけでなく、島恭彦による『西欧思想と東洋社会』[72]以来の課題であった植民地下のインド社会の構造分析が専門的歴史家によって開始された。土地制度史の研究は1970年代初頭までのインド史研究者の共通課題であった。またカースト制度の歴史的研究にとって示唆するところの多い社会人類学的調査についても、インド史研究者は早くから注目していた。1955年の『史学雑誌』レビュー[71所収]のなかで山崎利男は坂本徳松によるスリニヴァス(Srinivas)とメイヤー(Mayer)のカースト研究⁽¹⁾の紹介[66]に着目し、自身も1962年の『歴史学研究』(特集—インド史研究の現代的課題によせて)では、同じメイヤーの中央インドに関する社会人類学モノグラフ⁽²⁾を紹介している[121]。

このような南アジア史の研究動向は地域研究者に対しても多くの接点を提供するものであった。たとえば、アジア経済研究所の地域研究にとって同時期の中心的な研究課題であった土地改革問題(次章参照)は土地制度史研究と不即不離の関係にあった。

戦前の第2の関心がインド経済研究として継承されたことを示したのは、大阪市立大学経済研究所による『インド経済の諸問題』[40]の刊行であった(尾崎[47]の指摘も参照)。戦前からインドの棉作を通じて農業問題に関心を抱いていた狭間源三の農業労働者の分析[90]がここに収められている。また経済計画やアメリカの対外経済政策がインド経済分析における新たな課題として重視されている。大阪市立大学経済研究所の研究は、1960年の『アジアにおける農業構造の変革過程』[41](インドについては本多健吉が担当[105])を経て、その後マルクス主義内部の一つの流れであった「国家資本主義論」に依拠し、『アジアにおける国家資本主義の研究Ⅰ』[42]、『同Ⅱ』[43]のような成果を生みだした。この時期の国家資本主義論は国営部門を管制高地とする非資本主義的發展を展望する理論ではあったが、論集に含まれる個々の

論文では、土地改革についての古賀正則 [60] のように、必ずしもこうした楽観的な展望ばかりが示されたのではなかった。この研究の流れはその後、1980年に公刊された『第三世界と国家資本主義』[44]へとつながるが、そこでは、「国家資本主義」自体についての理解の統一性はもはや主張されていない。

戦前戦後の研究の関連については、このような素描にとどまらない本格的な研究が待たれる。本章の最後に、植民地の独立、ナショナリズムの高揚という戦後の新しい状況がアジア研究に与えた活発な刺激に言及しておこう。

戦前からのインド研究者でもある岡倉古志郎のこの分野での活動は、同じく蠟山芳郎、坂本徳松らの活動とともに、ナショナリズムへの関心の高さを反映し、かつそれを広げるうえで大きな役割を果たした。このなかでインドのナショナリズム研究も飯塚浩二らによるネルーの『インドの発見』[89]や大形孝平によるパーム・ダットの『現代インド』の翻訳[81]について、中村平治による研究[85]が進められた。大形や松本重治が1950年代末に組織した「インディア・スタディ・グループ」の活動は現代インド研究の先駆けとなった。これらの研究については第8巻で詳しく紹介するが、戦後の歴史学は、ナショナリズムをはじめとする戦後アジア社会の新たな胎動を自らの専門領域にかかわる問題として積極的に受けとめた。このことは、『史学雑誌』の戦後の研究レビューのなかにみられる「現状分析」的研究への関心の高さからも明らかである（東南アジアと南アジアについては史学会編 [71] 参照）。

南アジア史の研究者における、地域研究への関心の強さを示す一つの事例は荒による『世界』1961年12月号所収の評論、「アジアの認識とアジア研究——研究者の感想——」[4]である。荒は「針の穴をつつくような実証論文が発表される一方で、現代に近い時点を研究対象とすればするほど真の学問的意義が高いというような議論も一部で唱えられた。日本のアジア研究におけるマルクス主義の影響と、旧実証史学との潮流が、依然として並行したまま戦後の学会にもちこされてきている事実が、この二つの傾向とからみあった」と指摘している。しかし、もはや現実がそのような状況を許さないとす

る。つまり「アジア研究者は、その専攻する時代と内容の如何をとわず、その専攻するアジアの地域を中心とする、アジアの一般的状況に関して、狭義の専門の領域をこえた注意と関心を払うべきである」というのである。このように歴史研究と地域研究の相互理解は、いわば揺籃期の南アジア地域研究の欠くべからざる養分であったといえよう。

1950年代の末から60年代の初頭にかけて、アジア経済研究所の南アジア研究が開始された時点の研究状況は以上のようなものであった。戦前の経済研究との連続性、ナショナリズムや「国家資本主義論」に象徴される途上国経済の新たな展開、そして歴史研究との接点、これらを視野に収めつつ、アジア経済研究所の地域研究は独自の研究成果を築きあげてゆかねばならなかった。

[注] _____

(1) Srinivas, M.N., *Religion and Society in the Coorgs of South India*, Bombay, Asia Publishing House, 1952.

Mayer, A.C., *Land and Society in Malabar*, London, Oxford University Press, 1952.

(2) Mayer, A.C., *Caste and Kinship in Central India, a Village and its Region*, London, Routledge and Kegan Paul, 1960.

